

三

季節は進みます。

春も半ばになり、生垣の向こうに見える雑木林も新緑で覆われています。それらの木々の間を鳥たちが頻繁に飛び交っています。例えば、1年前の今ごろでした。最後にトモ子とこの縁側に座ったのは。そしていま、私の隣には誰もいません。と、しばらくしてノソが私の脇にやってきて日なたぼっこをし、そのうちに居眠りを始めました。

私は、「そうだ」と思い出しました。やはり去年の同じところに彼女と最後の旅をしたのでした。私はすぐにパソコンに向かい、トモ子はその時に撮った写真を見ることにしました。いまはノソも寝ている最中ですので、「彼」に邪魔されずにじっくりと見ることができませす。私はパソコンの背後にある窓を開け、心地よい春風を顔に受けながら、一枚一枚思い出の写真をながめました。

春真っ盛りの北上川。川をまたいでロープ

がかけられ、そこに数多くの鯉のぼりがつるされていた。川沿いの遊歩道の両側には桜並木が延々と続いていった。トモ子はその道で乗った観光馬車を「天国からのお迎え」といつていましたが、いまはもう本当に天国に行つてしまいました：

こんなことを次々に思い出していると、いまでもやはり感傷的になり、涙が出てきます。

「いかん、これじゃダメだ。こんなことでは、あの光源氏と同じじゃないか」

こんな私を、トモ子は雲の上から笑いながら見ているのでしょうか。

するとそのときでした。窓の外から綿毛のようなものが、いくつもふわふわと私の目の前に飛んできました。そしてそれらのうちのいくつかが、机の上のキーボードやマウスの上に落ちました。よく見ると、それらはタンポポの種のようにでした。

私は立ち上がって、窓の外を見ました。そうしたら、窓から二、三メートル先に五、六歳

くらいの女の子が、右手にタンポポの茎を持ち、にっこり笑いながらこちらを見ていました。そしてその子のおばあさんらしき人がやってきて、こういいました。

「これ！ヒカリちゃん、お隣の窓に向かって、タンポポの種を吹いたらだめよ」

そして今度は私の方に顔を向けて、謝るようにこういいました。

「どうもすみません。この子が変わないたずらをして」

私はその女の人を知っていました。お隣の家に住んでいる佐々木ミドリさんという人で、トモ子とはずいぶん仲がよく、ときどきこの家を訪れていたようでした。そしてミドリさんはトモ子のお見舞いや葬儀にも、もちろん来てくれた人でした。しかし、彼女にこんなお孫さんがいるとは知りませんでした。

ミドリさんに叱られたその「ヒカリちゃん」という女の子は、

「おばあちゃん、ごめんなさい」と、べそ

をかきました。

私は「そんなことは何ともない」という感じ
じで、ヒカリちゃんに対してにっこり笑い、
そしてミドリさんのほうに顔を向け、

「これは、これは、佐々木さん、トモ子が
いろいろとお世話になっていました。いまは
むさくるしい男のひとり住まいとなっていま
すが、もしよろしかったら、どうぞお立ち寄
りください」

といって、私はふたりをリビングに招き入
れました。

ふたりは室内に入ると、まずトモ子の遺影
に向かつて両手を合わせました。そのときに
女の子は、「トモ子おばちゃん、いなくなっ
ちゃったんだね」と無邪気にいいました。

私は、トモ子とつながりがあつた人から思
い出話を生で聞く機会が思わず訪れたので、
久しぶりにうきうきしながら、ふたりをテー
ブルにつかせました。

ミドリさん一家は、現在彼女と彼女の娘夫

婦、それにその夫婦の一人娘（すなわち、ミドリさんの孫娘）のヒカリちゃんの4人家族で隣の家に住んでいます。ミドリさんは元々娘夫婦とは離れて住んでいたのですが、共働きの娘夫婦に子ども（ヒカリちゃん）が生まれたあと、その子の面倒を見るために彼らの家で同居するようになったとのこと。なおミドリさんの夫は、もう十年以上も前に亡くなってしまったそうです。

ミドリさんはとても気さくで品もよく、こちらに引っ越してきた当初からトモ子と仲よくなつて、日常的にあいさつ話をしたり相互訪問したりして交際しただけでなく、ときにはいっしょに買い物をしたりサークル活動を楽しんだそうです。またトモ子とは電子メールでも連絡をとりあっていたということ。彼女の年齢は不詳ですが、おそらく私と同世代なのだと思います。

ヒカリちゃんは、小学二年生のとても活発な女の子で、髪型はショートボブのような肩

にかからないでいどの長さにそろえられています。顔立ちはドングリ眼のどちらかという
と童顔であり、私が第一印象で「五、六歳」
と見たのはそのためです。

ヒカリちゃんは人なつこい性格で、トモ子
がこの一家を訪問した際には「トモ子おば
ちゃん」と呼んで、大変よくなついていたそ
うです。そして休日には、あの児童公園で近
所の子どもたちとよく遊び、ときには両親と
いっしょにでかけることもあるということ
です。したがって、この子がミドリさんと連れ
添っているのを見たのはこの日が初めてであ
り、まさかミドリさんにこんなかわいいお孫
さんがいるとは知らなかったのです。

私たちは、このときの顔合わせですぐに意
気投合しました。

ミドリさんはトモ子のように、会話術に優
れていました。彼女は次から次へと適切な話
題を設定し、私との間にあの重苦しい「沈黙」
というものを生じさせません。その上、やは

りトモ子のように、抑揚のある、語りかけるような口調で話をします。彼女が語った自身の生い立ち、トモ子との思い出話など、私を一向に飽きさせることがありません。私はミドリさんに、すっかり親しみを感じました。あるいはもしかしたら、このときすでに「それ以上のもの」を感じていたのかもしれない。

いっぽうのヒカリちゃんは、「古民家」のようなこの家（単に私の手入れが行き届かず、古く見えるだけなのですが）が気に入って、「これから、ときどき遊びに来てもいい？」といいました。

私には願ってもないことなので、

「いつでもいいよ。おじさんは大歓迎だから」と応えました。

ヒカリちゃんはとてもよろこんだ様子でした。そして彼女は、これからは私のことをシンプルに「おじいちゃん」と呼ぶことになりました。私はこの「おじいちゃん」という呼

び方に対して、不覚にも顔を赤らめてしまいました。ヒカリちゃんの母方の祖父は彼女が生まれる以前に亡くなっていたのですから、私をその人の代わりにストレートに「おじいちゃん」と呼ぶとしても、あながち不自然なことではないのですが、この子がミドリさんを「おばあちゃん」と呼んでいたいっぽうで私を「おじいちゃん」と呼ぶことは、一瞬私に、「ミドリさんとの将来」への期待をいだかせてしまったのでした。

やがて彼らが、このように取り留めもない談笑を切り上げて帰るときとなりました。このときには、縁側で居眠りをしていたノソも目を覚ましていました。帰り際にヒカリちゃんにはノソの頭をなでて、

「今度来たときは、ごちそうしてあげる」

といいました。ノソにはもちろんこの言葉の意味などわかりませんが、それでも利にさといネコなりに何か期待感を持ったらしく、私が普段聞いたことがないほどの、甘えるよ

うな声で鳴きました。

二人が帰ったあと、私は実に久しぶりにうきうきした気分になりました。新たにかわいらしい子どもとすてきな女性が家族に加わったようなうれしさを感しました。

「それにしても」と、どういうわけか気になつて仕方がなかつたのは、ミドリさんのことです。「あの人」の年齢のことは、さすがに直接は聞けないけど、趣味や考えていることなど、もつと聞いておけばよかつたと思うと、どうもじつとしていられなくなりました。

「そうだ、ミドリさんはトモ子とメールのやりとりをしていたのだ」から、トモ子のメールを調べてみることにしました。

ところが、いまになつて気がついたことですが、私はトモ子のメールアドレスのパスワードを知らないのです。彼女のメールアドレスについては、過去何回も彼女からのメールを受け取っていたから知っていました。パスワードについては彼女から知らされてな

かったのです。

トモ子のメールアカウントはウェブブラウザ（インターネットの閲覧ソフト）でアクセスできる無料のアカウントですので、私はまずその入口のページにアクセスし、彼女のメールアドレスを入力しました。すると次にそのパスワードを求められました。私はそこで、トモ子の誕生日や好物などで、考えつく限りの英数字を入力してみました。が、いずれも受け付けられませんでした。私は仕方なしに、もうここであきらめることにしたのです。

私は次の「彼女たち」の訪問に備えて、家の掃除に取りかかりました。そこで改めてまわりを見回すと、男の一人住まいとはいいなから、よくここまで雑然としたところで生活していたものだど、恥ずかしさを覚えました。

リビングの整理整頓のあとは、庭の草取りを行いました。この庭に以前はトモ子がいくつかの植木鉢を置いて四季の花を楽しんだものでした。もちろん私にもそうした風流を愛

でる心はありますが、それより植木の世話を
するわずらわしさへの心の負担のほうを強く
感じていたため、いまでは何も置いていませ
ん。草取りを始めると、ノソはまたのんきに
縁側に座って眠りだしました。

「こら、おまえも寝てばかりいないで、少
しは手伝え！」と、無駄なこととは知りなが
ら、ノソを叱りました。

こんな狭い庭ですけど、ここをヒカリちゃ
んが元気に走り回る姿を想像すると楽しくな
り、草取りも一向に苦になりませんでした。
すると、児童公園の方から聞き覚えのある歓
声が聞こえてきました。私はいったん立ち上
がって生垣越しにその公園内をながめまし
た。ヒカリちゃんはまだもう、友だちといっしょ
にブランコで遊んでいたのです。

翌週の日曜日、さつそく私の期待は現実の
ものとなりました。ヒカリちゃんは手に何か
を持って、ミドリさんとともにこの家にやっ
てきたのです。するとそのとき、どこから

ともなく、ノソがヒカリちゃんのもとに駆け寄ってきました。彼女が手にしていたのは、「おいしそうな」市販のキヤットフードだったのです。ノソは、動作は鈍いものの、嗅覚はまだ敏感なようです。

私とミドリさんは縁側に並んで腰をかけながら、ノソにキヤットフードを食べさせて遊んでいるヒカリちゃんを笑顔でながめました。この縁側で、女の人が私の隣に座るのは実に一年ぶりのことです。

私は1年前ここにこうしてトモ子と最後に座り、語り合った思い出を、ミドリさんに語りました。彼女は、

「まあ、そうでしたの」といい、ハンカチを取り出してしばらく涙ぐんでいました。そして今度は静かに微笑むと、やにわに、

「わたしじゃ、トモ子さんの代わりは務まらないかしら？」

と何気なくいいました。

私は、「まさか、そういうつもりで言った

のではないだろう」ということはわかっていた
ましたが、情けないことに感情を抑えきれず、
思わず赤面してしまいました。

するとこの様子を見たヒカリちゃんは、

「おばあちゃんとおじいちゃん、おにあい
だね」

とニッコリ笑って追い打ちをかけたので
す。私は赤面に加えて、手のひらが汗でぐっ
しよりとなりました。

まったく、女の人というのは、年齢に関係
なく、男をからかうようなひどい冗談が好き
なものです。

この日から数日間、ヒカリちゃんは学校か
ら帰ると、この家に顔を出すようになりまし
た。私はよろこんでヒカリちゃんに昔話など
を聞かせてやりました。

そして彼女が来るのを楽しみにしているの
は私だけではありません。ノソも彼女が持つ
てくるキャットフードを待ちこがれていたの
です。これですっかり“美食家”になったノ

ソは、もう私と与える煮干しや魚の骨など見向きもしくなくなりました。「彼」はヒカリちゃんか帰ったあとも隣の彼女の家までいってキヤットフードをねだっているようです。そのくせ寝るときなどは悪びれもせず、私の家に帰ってきます。この分だと、ノソの「メタボ」ぶりにますます拍車がかかっていくことは避けられません。

それから数日経って、世間でいう「ゴールデンウィーク」なる大型連休がやってきました。ヒカリちゃん一家は何か「重要な話」があるとのことで、お父さんの実家のある仙台に帰省することになりました。「彼女たち」の訪問の機会が増えることを楽しみにしていた私にとっては、少しがっかりです。

でもこの一家は、連休が終わる二日前にはこちらに戻ってきました。ミドリさんはヒカリちゃんを伴って私の家を訪れ、おみやげとして名産の笹かまぼこを買ってきてくれました。私も東北出身なので、これをいただいた

ときは、なつかしさを感じてうれしかったのですが、何分にも一人暮らしですので、

「ちよつと、ひとりでは食べきれませんね」とお礼をいいながら笑うと、ミドリさんはノソを指さして、

「余ったら、その子にもあげてください」といいました。気のせいかもしれませんが、このときのミドリさんの表情は、私には何だかさみしそうに感じられました。

連休最後の日は、お昼すぎから近所の子どもたちが児童公園に集まって、かくれんぼを始めたようです。そしてしばらくすると、ヒカリちゃんが家の庭に入ってきました。私が声をかけようとすると、彼女は人差指を一本出して口にあて、「シー」のポーズをし、生垣のかげに隠れました。鬼の「もういいかい」に対して子どもたちが全員「もういいよ」といったあと、鬼役の男の子が探しにきますが、ヒカリちゃんだけは見つかりません。うまく隠れることができたヒカリちゃんは得意げに

なつて私に向かつてVサインをし、私もそれに対して声をたてずにニッコリうなずきました。

ところがそこにノソがやってきて、このスリリングな雰囲気をぶち壊してしまいました。ノソは生垣に身をひそめているヒカリちゃんのそばに行くと、例のキャットフードをねだって大きな声で鳴きました。この鳴き声に気づいた鬼役の男の子は生垣の中をのぞき、

「ヒカリちゃん、みーつけた！」

とよろこびました。ヒカリちゃんはしよんぼりしながら、この男の子についていききました。これ以降、かくれんぼで子どもたちがこの庭に隠れにやってくることはなくなりました。この場所が「ヒカリちゃんの隠れ家」として、もうみんなにバレてしまったからです。

季節は進みます。

今年は梅雨明けが早く、7月の初めにはもう外では厳しい暑さに見舞われています。

私たちは、梅雨明け前の、まだそれほど暑くない時期には近所を散策してアジサイの花などを観賞したものでした。ここで「私たち」というのは、私とミドリさん、それとときにはヒカリちゃんも伴って、という意味です。もうこのころには、「私たち」は家族同様のつきあいになっていたのです。

最近になってこの辺では、私とミドリさんがよくいっしょにいるようになったので、何か「あらぬうわさ」が広がりだしたようですが、少なくとも私はそのことを一向に気にしていません。なぜならば、私たちふたりは、いまは「独身同士」であり、なるようになってきたからといって、何ら恥じることはないからです。

そんなことより、私にとってうれしいことは、ミドリさんとの「交際」によって、私の人づきあいの範囲が大きく広がっていったことです。私はこのように、自分の方から自分をさらけ出して交友関係を広げることが不得

意な人間ですので、人づきあいのいいミドリさんをいわば、「触媒」として交流が広がっていくことは、なんともありがたいことなのです。私は本来この役割を、やはり人づきあいのいいトモ子に期待していたのですが、彼女があのような形でいなくなったことから、この面でも途方に暮れていたところでした。

それにしても、このところの暑さは異常です。世間では「命の危険の感じるような暑さ」とまで形容している人もいるくらいですから、夏休みに入っても、子どもたちは外で遊ぼうとしません。だから、この夏の児童公園は、残念ながらいつも静まり返っているようです。それで、あれほど活発なヒカリちゃんも、この夏休みは室内で過ごすことが多くなっています。

それでも、そこはやはりちゃっかりした現代っ子です。彼女は、「おじいちゃんに宿題を手伝ってもらおう」と夏休みの宿題帳などをどっさり抱え、そして手にはキャットフー

ドの箱を持って毎日のようにやってきました。その上このころになると、茶目っ気ぶりにもいつそう拍車がかかって、玄関口ではドアチャイムの音を口真似して、

「ピンポーン！ヒカリちゃんだよ！」
と大声で私を呼びます。

私はよろこんで玄関まで出迎えに行きますが、たいていはノソのほうが私を追い抜いて駆け寄っていきます。

8月になり、トモ子の一周忌が近づいてきました。大変ありがたいことに、その一周忌の集まりを持とうという声があちらこちらから湧き上がってきました。これも生前の彼女の人柄がなせることでしょうか。それで、この地域ではミドリさん、旧劇団関係では扇佳子さんが中心になって参加者を募ってくれました。

その「集まり」は、実際の一周忌よりあとの8月の下旬にもたれました。参加者はトモ子の墓参りのあと、ある会館の一室を借り

きつて、それぞれが彼女の写った写真や思い出の品を持ち寄り、彼女の思い出話をしました。またそこには、出前のオードブルや寿司、さらに飲み物や手作りの料理などが持ち込まれて、実にアットホームな軽食の場も持たれました。トモ子もきつとよろこんでくれたことと思います。なお、この「集まり」には、私の近所からはミドリさんのほかに何人かの人たち、劇団関係者は佳子さんのほか5、6人の人たちが参加してくれましたが、三村悠介さんは来ていませんでした。

「集まり」がお開きになったとき、佳子さんは私に一枚のメモ用紙を渡して、

「栃木さん、これは去年お見舞いに行ったときにトモ子さんから預かったものです。トモ子さんからは、『私が死んで1年以上経ってからコーちゃんに渡して』といわれました」といいました。佳子さんが三村さんとともに昨年お見舞いに病室を訪れ、私がその場をはずしていた間に渡されたものなのでしよ

う。私とそのメモ用紙を見ると、そこには、意味のない8桁の英数字が書かれていただけでした。

「この文字列は、いったい何を意味しているのですか？」

「さあ、わたしにもわかりません。トモ子さんから、『とにかく、これを渡して』といわれただけなので」

私はこの文字列については、「あれに違いない」とうすうすと心当たりがありました。はやる心を抑えつつ家まで帰り着き、すぐにパソコンを起動しました。そしてウェブブラウザでトモ子のメールアカウントにアクセスすると、パスワードとしてこの文字列を入力しました。すると案の定、彼女のメールを開くことができたのです。

トモ子はメールの中に、私に伝えたいメッセージを遺していたのでしよう。しかしそうであるならば、なぜ私のメールアドレスあてに直接それを送らなかつたのでしよう。また

なぜ死後少なくとも一年間ものあいだは、私にそれを見せたくなかったのでしょうか。私の心の中に、彼女への微かな不信感のようなものが芽生えてきました。

私はまず、それぞれのメールフォルダの状態を調べました。「受信箱」以外のフォルダはすべて空になっていました。トモ子が最後に各フォルダ内のすべてのメッセージを削除したに違いありません。

いっぽう、「受信箱」にはおびただしい数のメッセージが残されていました。そのほとんどが、化粧品や健康食品等、さまざまな商品の売り込みを図るためのいわゆる「セールスメール」でした。

「トモ子がそれ以前のメッセージをすべて削除したとすれば、問題のそのメッセージはいちばん日付の古いものであるはずだ」と私は考え、もったも古いメッセージを探しました。すると、「コーちゃんへの遺言」と、そのものずばりの件名で、「送信元」と「送信

先」がともにトモ子のアドレスのものが見つかりました。このように自分自身あてに送ったメールは「送信済みメール」フォルダーだけでなく、「受信箱」フォルダーにも残されるのです。そしてその送信日時は、彼女がこの家で過ごした最後の夕方、すなわち買い物からいったん忘れ物を取りに戻った私に対して、彼女があわててパソコンの画面を隠そうとしたそのときを示していました。

私は恐る恐るこの「コーちゃんへの遺言」を読み始めました。

愛しのコーちゃん

きのうのお花見、天気もよく、うららかで本当に楽しかった。あの道の両側にどこまでも続く桜並木のなかをあなたといっしょに馬車に揺られていたら、天国というのはこんなところだったらいいなとうっとりして、ついその「天国」という言葉が口をついて出てし

まいりました。あなたを悲しませるつもりなど
なかったの。ごめんなさい。

でも、わたしにはもう“旅立ち”のときが
すぐやってくるといふのはわかっていまし
た。それはコーちゃん、あなたにもわかって
いたはずです。だって、あなたの顔にそう書
いてあったから。それにしても、あなたのお
芝居は下手ね。少しはわたしが教えてあげれ
ばよかった。

コーちゃん、もういまとなつては強がりな
どやめて、はつきりいうけど、わたしはまだ
死にたくない！あなたともつともつと生き
ていたかった。だけど、「そのとき」という
のはだれにも来るものだし、拒むことができ
ないものね。わたしの場合は少し早いのかな
とうらめしく思うけど。

それで、この期に及んで、もしあなたとの
人生が、多少の過ちはあったとしても、大筋
で悔いのないものだったなら、わたしもこん
なくどくどくとしたメツセージなど残さずに、あ

あなたに感謝の言葉を告げて笑って死んでいけるかもしれないけれど、本当に残念なことに、わたしにはそんな資格はありません。わたしは、死ぬ前に懺悔ざんげが必要な、そんな女なのです。

コーちゃん、わたしはいまからあなたに、その懺悔の告白をします。

でも、これをいまずぐにはあなたに聞かせたくない。だって、あなたがこのことを知ったときの悲しい顔をわたしは見たくないから。

じゃ、わたしが死んだらすぐに知らせようかしら？ でもそれもいや。だって、そうしたらわたしはあなたにひどく軽蔑されるから。わたしって、本当に身勝手な女。

だからわたしは、あなたがこのメッセージを読むのは、わたしが死んでから一年以上過ぎてからになるように細工をします。わたしは、1年経てば、あなたがこの告白を受け入れられるようになると思います。

しかし、そもそもこのメッセージがあなたに読んでもらえる保証がないのです。

コーちゃん、もしあなたが、わたしの死後わたしに関心がなくなってしまうならば、あなたはわたしのメールなど調べようともせず、したがって、このメッセージは読まれることもなく、どこかに消えてしまうことでしょう。だけどそうなれば、もう関心のない女の懺悔などあなたにはどうでもよいことになるので、わたしの告白なぞあなたに聞かれなくても、わたしは一向に構いません。それでも、やっぱりわたしはあなたを信じています。あなたならきつと、このメッセージにたどり着いてくれるものと。

前置きが長くなつてごめんなさい。結論を言います。わたしは罪深い女です。わたしはあなたの愛を裏切りました。

話はわたしがまだ劇団員だったころにさかのぼります。わたしはあなたとまだ知り合う前、劇団内のある男の人に恋していました。

その人とは、あなたも見た『忘れ去られた苦悩』のヒーロー役を演じた人で、名前を三村悠介といいます。わたしと三村さんはどちらともなく、おたがいにひかれあって、劇団内で人目を忍んで密かに交際していました。

ところが、三村さんは気が多いとでもいうのでしょうか。その後、劇団の団長の娘とも浅からぬ仲になり、結局はわたしを捨て、その娘と結婚することにしたのです。おそらくその父親の団長が、演劇界にも顔がきく人物であり、その人と姻戚関係になることでその後の彼の俳優への道を有利にしようと考えたからでしょう。

だから、あのあなたもほめてくれた『忘れ去られた苦悩』でのわたしの演技は、実は単なる演技などではなく、真実の自分の心情を舞台上で訴えたものでもあったのです。それで舞台が終わったあと、ヒロイン役の扇佳子さんが「私が本当の恋敵だったら、思わずぞつとするほど、すごい演技だった」と絶賛して

くれました。だけど実際にそのときに念頭に置いていたのは、佳子さんではなくて団長の娘だったのです。

それでも、その当時わたしは、「失恋も芸のこやし」と考えて、前向きに演劇に打ち込もうとしていたのです。しかし団長の娘は、わたしが三村さんのかつての交際相手であることを知り、彼女の父親である団長にはたらしきかけて、わたしを劇団から追い出そうとしました。その結果、わたしにはもう端役はおりか、エキストラ役ですら与えられなくなりました。事情を知らないほかの劇団員やそれからコーちゃん、あなたも、わたしが劇団を去ったのは、からだをこわしたからだと思っていたようですが、わたしはちよつと病気になるたぐらいいは役者の道をあきらめたりはしません、さすがにこのような仕打ちにあって、もうどうにもなりませんでした。

そういう絶望のときにわたしの力になってくれたのは、コーちゃん、あなたでした。あ

あなたはわたしを慰めてくれただけでなく、わたしが女優の道をあきらめないように後押ししようとしてくれました。このときのわたしには、あなたのその気持ちだけでもう十分でした。わたしはあなたと新しい人生を歩む決意をしたのです。

結婚して何年かは、わたしは三村さんのことなど忘れていました。わたしはとにかく、自分のしあわせをつかもうと精いっぱいだったのです。

それでも、わたしたち夫婦のあいだには徐々に溝ができていきました。きつとわたしがあんまり子どもを欲しがるものだから、コーちゃんはうんざりしたのでしょうね。そりゃ、わたしたちはふたりとも子ども好きで、こちらに引越してきた当初はすぐ近くの児童公園から聞こえる子どもたちの歓声を聞いてほほえましく思ったものでしたが、そのうち、自分たちには子どもができないのではと、あきらめの気持ちが大きくなっていくと、子

どもの遊ぶ声を聞いたり、近所でかわいらしい子どもを連れられた親子連れを見かけたりするのがだんだんつらくなってきました。

そんなとき、あなたは、「養子をもらおうか」といつてくれたことがありますね。いまから考えるとそれも一つの案だったのでしょうか、
けれども、当時のわたしは依怙地いこじなところがあつて、

「あなたは、わたしのことを、子どもができないダメな女だっていいたいんでしよう！」

と心無いことをいい、ますます自分自身を精神的に追い詰めてしまいました。

コーちゃん、あなたはこんなわたしにうんざりしたのでしょう。あなたは会社で夜遅くまで仕事をし、家にいるときでもわたしとあまり会話をしないようになっていきました。でもそれも無理もないことだと思いました。

そんなときに、あの扇佳子さんから、「あなたに会いたいという人がいるの」との誘い

がありました。佳子さんとほかの何人かの昔の劇団仲間とは、わたしが劇団を辞めてからもずっと交流が続いていて、ときどきいろんな演劇の公演を見にいったりしたものでした。

それでその場に顔を出すと、そこには何と三村さんがいたのです。佳子さんはわたしと三村さんとのいきさつを何も知らないのか、かつて劇団を盛り上げたこの三人が顔をあわせれば、おたがいに感慨深いものがあるだろうと考えたに違いありません。

久しぶりに会った三村さんは、いくらか年老いてやつれ、白髪が少し目立っていました。が、面影は以前と変わっていませんでした。

三村さん自身の身の上話によると、彼は例の団長の娘との結婚後、団長の口利きもあって、いくつかの映画やドラマへの出演の売り込みを図ったものの、どれも成功しませんでした。その理由は演技力の不足によるものでなく、彼があまりにも“平均的な”二枚目

すぎて、個性というものに欠けたからでした。役者の世界というのは、演技がうまいだけでなく、「その役はその人でなければダメだ」というほかの人に置き換えることができない個性というものが必要なのですが、残念ながら、三村さんはほかの“二枚目役者”との置き換えが容易に許されるような、ありふれた俳優だったのです。

結局彼は、いつまでたってもエキストラでいどの役しか与えられず、失意のうちに俳優への道を断念してしまったのでした。そしてその後は、父親の事業を引き継いだものうまくいかず、酒に溺れがちな荒れた生活を送るうちに妻とも離婚したということでした。三村さんはそのとき、「ボクの人生は、父親が残した株などの資産を食いつぶしているだけの人生だ」と自虐気味に語っていました。

通常の場合ならば、自分を裏切った昔の恋人のこんな窮状を聞いて、「自業自得よ」と突き放すように見るものですが、わたしはそ

のとき、三村さんのことを無性に気の毒に思いました。そりゃ、そのときにあなたとの間にすきま風が吹き始めていたせいもあるかもしれないけれど、基本的にはわたしが単に未練がましい女だったただけなの。

それに、いつもは落ち込んださえない表情をしていた三村さんですが、演劇のことや劇団員でがんばっていたときの話を始めると、まるで急に人が変わったように生き生きとして語り出すのでした。それを見たら、わたしもそれに引き込まれるように思わず夢中にさせられたのです。

そのときから、わたしと三村さんとの「つかず離れず」の関係が始まりました。わたしたちは、ひと月に何回か逢瀬を重ねました。コーちゃん、ごめんなさい。わたしが「きょうは、昔の劇団仲間の集まりがあるの」というていたときの二回に一回くらいは、本当は三村さんとふたりだけで会っていたのです。

こんな生活をずるずると何年も続けていた

とき、お隣に若い共働きの夫婦が引っ越してきました。やがてふたりの間に娘さんが生まれると、その養育のために奥さんは自分のお母さん、つまりその娘さんにとってはおばあさん、を呼び寄せ同居してもらいました。

そのおばあさんとは、あなたも知っている佐々木ミドリさんです。ミドリさんがこの家に引っ越しのあいさつに来たとき、わたしは「この人とは気があう」と直感しました。そしてわたしたちは実際すぐに仲良しになりました。

わたしはミドリさんの住むお隣の家を毎日のように訪問しました。ミドリさんとおしゃべりするのが楽しかっただけでなく、何よりも生まれたばかりのヒカリちゃんという娘さんを見るのが楽しかったのです。

ヒカリちゃんはお隣の家にとっただけでなく、わたしにとってもまさに天使のような子でした。本当に無邪気によく笑い、よく泣き、わたしにもよく懐^{なつ}いてくれました。わたしが

ヒカリちゃんに接するときの態度があまりにもうれしそうなので、ミドリさんは、

「この子を自分の子どもだと思ってくれてもいいのよ」といつてくれました。

そうです。自分の子どももじゃなくても、深い愛情を注いで少しも構わないのです。わたしは自分の心の中の暗雲が一気に晴れていくのを感じました。

わたしは次に三村さんに会った機会に、

「わたしたちがふたりっきりで会うのは、これを最後にしましょう」

と思い切って切り出しました。

すると三村さんは意外なほどあっさり、この提案に同意し、

「ボクは単に、ボクのことをわかってくれ、相談相手が欲しかっただけかもしれない」と付け加えました。

わたしと三村さんとの精神的関係というのは、このていどだったのです。わたしは三村さんのあまりにも淡泊な態度に少しがっかり

しました（こめんなさい、コーちゃん）が、ともかくこれでふたりの関係には終止符が打たれたのです。これ以降、三村さんと顔を合わせるのは、あくまでもその場に同席している何人かの劇団仲間の一人としてであり、ふたりだけで会うことはなくなりました。

コーちゃん、わたしと三村さんとは、これがすべてです。しかしあなたが、わたしのこの告白内容を信じようと信じまいと、わたしがしたことはあなたへの裏切りであり、世間でいう「不倫」ということになるでしょう。

わたしは、「あなたに許してもらえろ」と考えるほどあつかましくはありませんが、願わくは、あなたがこの告白文を読むときは、わたしのこの愚かな過ちを軽く受け止められるほど、心の余裕を取り戻していることを祈っています。

コーちゃん、あなたと過ごしたこの最後の一年間は、これまでのわたしの人生でいちばんしあわせな一年間でした。あなたが会社の

定年を迎えたとき、わたしはあなたとの「心の溝」を埋めようと決心しましたが、実はそのような「心の溝」などは初めからなく、わたしが勝手にそれがあるとつい違いをしていただけだとわかりました。わたしたちがおたがいに少しでも歩み寄りさえすれば、こんなに楽しい充実した日々が過ごせたのですもの。わたしたちは、やっぱりお似合いの夫婦だったのですね。

最後に、コーちゃん、悲しくそして心残りですが、わたしはあなたをあとに残して、先に逝ってしまいます。でもコーちゃん、決してすぐに後を追おうなんて思わないで、あなたはこれから、できるだけ長い人生を楽しんでください。何か困ったことやさみしいことがあったら、お隣のミドリさんに相談したらいいでしょう。彼女はきつとあなたの力になつてくれると思います。またそのお孫さんのヒカリちゃんもかわいがってあげてください。あなたもわたしと同じくらい子ども好き

ですから、その子の顔を見ただけで癒される
と思います。

トモ子

わたしはこの長いメールを読み終わったあと、「これでトモ子が最後の言葉で『許して』と口にした意味がわかった」とつぶやき、しばらく放心状態になって頭を抱えました。そしてまた本文を何回か読み返しましたが、しまいにはただ文字を目で追いかけるだけになりました。

そしてこの精神状態のまま、今度は「受信箱」のメール一覧を順番にながめてみました。すると「セールスメール」らしきものが並んでいるなかで、差出人が「三村悠介」のものが1通だけ見つかりました。日付はトモ子が再入院してから数日経ってからのもので、その内容は、「あなた（トモ子）ががんを患っていることを、佳子さんから聞いて初めて

知った。どうしていままで自分に知らせてくれなかったのか」と問い詰めるものでした。

この文面を見る限り、トモ子は三村とずっと連絡をとっていなかったことがわかり、少しホツとしました。

すると次に私は、この二人の「関係」が「どこまでいったのか」を無性に知りたくなり、この三村からトモ子へのメールへの「返信メッセージ」としてこのことを問い詰めました。実をいうと、いっぽうでは逆にこのことを「知りたくない」という感情もあったのですが、このときは「知りたい」という異様な好奇心のほうに打ち勝ってしまったのでした。

そのあと、私は何もする気力が湧きませんでした。パソコンの電源を切り、リビングに移り、ソファの長椅子に腰を下ろすと、静かに目をつむりました。

「オレがいつたい、トモ子に対して何をしたというのか。どうしてこんな目に遭わなけ

ればならないんだ。いや、むしろ、『何をすべきだったのか』を問うべきであろう。ではその『何』とんなのだらう」

私の思考は堂々巡りを始めました。ふと気がつくと、私の脇にノソが寝ていました。隣のヒカリちゃん家から戻ってきていたのでしよう。私は、「ちえっ、こいつには何の悩みもないんだな」と思い、寝る時間にはまだかなり早いのですが、ふとんを敷いてそこからだを横たえました。

翌朝になりました。私は昨夜あまりよく眠れなかったせいか、ぼんやりとテレビを見ながら朝食を食べていました。テレビのワイドショーでは、ある芸能人の不倫を取り上げていました。

ほとんどの視聴者はこのできごとを“三人称”の、いわば他人事としておもしろおかしく見るのでしょうか。しかしいまのわたしは、まるで対象となっている芸能人の家族を自分のことのように思えるのです。

朝食後あまりあいだを置かず、玄関のところでにぎやかな声が聞こえてきました。きょうのヒカリちゃんは早めの登場です。

「ヒカリちゃん、おはよう。きょうはだいぶ早いねえ」

「だって、きのうは、おばあちゃんもおじいちゃんもいなかったから、宿題がぜんぜん進まなかったんだもん」

「夏休みはもうすぐ終わるんだから、自分ひとりだけのときでも、なんとかしなくっちゃね」

「わかってるよ。でも、おじいちゃんは、わたしの宿題を手伝っているとき楽しそうにしているから、おじいちゃんの分とっておいたんだよ」

なるほど、よく私のことを観察しているものです。実際に私は、この子といるときが楽しくてしょうがないのです。それにしても、なんとという天真爛漫な子でしょう。てんしんらんまん

「そうだ」と私は思いました。トモ子はこ

の子の純真さに接するなかで、心が洗われ、三村との密会を打ち切ったのです。してみると、この子のおかげで、トモ子の魂は救われたといえるのです。昨夜からの私の暗く沈んだ心に、いくらかの晴れ間が見えたような気がしました。

「きょうの分」の宿題を終えると、ヒカリちゃんはノソにいつものようにキヤットフードを食べさせ、楽しそうにはしゃぎながら帰っていきました。「きょうは涼しいから、外で友だちと遊ぶんだ」そうです。

私のほうはおもむろにパソコンを起動してみました。すると、きのう三村を問い詰めたメールの返信が返ってきていました。彼はきのうの夜遅くまでこれを書いていたようであり、かなり長文のメッセージのようです。私はどきどきしながら、その本文を読みました。

栃木浩二様

いただいたメールの差出人がトモ子さんであるのを見て、一瞬オカルトめいたメールか
と思い、背筋が寒くなりましたが、文面を拝
見し、事情を納得しました。

あなたはトモ子さんと私とのことを、どこ
まで彼女から知らされているかわかりませ
んが、まず、彼女との出会いと最初の別れのい
きさつをお話しします。

トモ子さんは私より3年遅れて劇団に入っ
てきました。彼女が演劇にかける情熱はほか
の劇団員の誰にも負けないものがありまし
た。彼女は夕方まで喫茶店でアルバイトをし、
夜は劇団でそれこそ一心不乱に稽古けいこに励んで
いました。

私はそんな彼女の情熱に感化されました。
こういう私も俳優への夢断ちがたく、父は会
社のオーナー経営者で、私にあとを継ぐよう
に命じたのを振り切って家を出たくらいでし
たが、彼女の熱意は私のそれを上まわって
いました。私たちは稽古の場では、先輩・後輩

の垣根を越えておたがいの演技を批評しい、演劇について議論しあいました。

そんななか、私は稽古の帰りに彼女を食事に誘いました。「議論の続きをしよう」という名目でしたが、女性としての彼女の魅力にひかれたのもその理由です。私たちはこれを引きっかけに交際を始め、やがては将来を約束するところまでいきました。

しかしある日のこと、私は劇団の稽古を見物に来た団長の娘と目が合い、おたがいに笑みを交わしました。私はこの点については反省することが多いのですが、女性にはだらしがない性格でした。二人が「いい感じ」であることを察知した団長は、私を娘の結婚相手にすることを条件に私の将来への支援を約束しました。その当時「何としても俳優としてデビューしたい」と考えていた私は、この話に心を動かされてしまいました。それに彼女は外見上も申し分ありませんでした。

それで結局私はトモ子さんを「捨てた」こ

とになってしまったわけですが、それでもトモ子さんは、みんなの前では決して落ち込んだところを見せず、演劇に以前よりいつそう真剣に取り組みました。そして、あなたもご覧になった『忘れ去られた苦惱』では、彼女は私に対してまさに鬼気迫る演技を見せました。私は「これはあながち“演技”の上だけのことではない」と感じました。

私はトモ子さんをこんなに苦しめたせめてもの償いとして、彼女の女優への夢が成就するように祈りました。しかしあるとき、私はうっかり「婚約者」となった団長の娘に対し、私がかつてトモ子さんと交際していたことを漏らしてしまいました。するとこの娘は父親である団長に、トモ子さんを劇団から追い出すように無理強いしました。

この劇団において、団長は主宰者であり、演出家および総監督でもある絶対的な存在ですが、さすがにトモ子さんという優れたメンバーを追い出すことはせず、かといって娘の

要求を無視するわけにもいかなかったので、とりあえず、彼女をすべての役からはずしました。

私もこの娘に対して「トモ子さんに罪はないのに、なぜそんなひどいことをするのか」とたしなめました。逆にこのことがこの娘をさらに逆上させ、トモ子さんにもつといやがらせをするように父親に迫りました。

このようなことが重なって、トモ子さんはストレスと過労のため体調を崩し、ついに劇団を辞める事態に追い込まれました。彼女が劇団を去る際にあいさつに来たとき、彼女はまっすぐに私の目を見据えてこういいました。

「わたしには、いまわたしを励まし、力になつてくれる大切な人がいるの。わたしは必ずこの人としあわせを築いてみせる」。

このときのきらきら輝いていた彼女の目を私はいまでも忘れません。私はその場で、ただただ目に涙を浮かべて頭を下げるのみでし

た。

その後の私の人生の凋落ちようらくぶりについては、トモ子さんにもあなたにも何の関係もないことなので、あえて詳しくは触れませんが、要は私の力不足とだらしなさのため、俳優になるという夢に破れ、それでしぶしぶ継いだ父親の事業もうまくいかず、妻にも離婚され、しまいには酒に溺れがちのすさんだ人生を送る羽目になったのです。

その後何年か経ったある日、かつての劇団仲間の扇佳子さんから連絡が入り、久しぶりにトモ子さんに会うことになりました。そのとき私は、自分の身を恥じるどころか、逆にその当時の自分の落ちぶれた姿を隠すことなくトモ子さんの前にさらすことにより、彼女を裏切った男のなれの果てを見てもらい、その上で彼女に心からわびようと決意したのでした。

ところがトモ子さんは、こんなみすぼらしい私の姿を見て、芝居などではなく（私だっ

て役者の端くれですから、人の態度が本気かそれとも芝居かはすぐわかりますし、本当に憐憫れんびんに満ちた表情を浮かべたのでした。そして私の近況について根掘り葉掘り聞いてくるではありませんか。

あまりにトモ子さんが深く突っ込んで聞くので、側にいた佳子さんは顔をしかめ、話題を変えようと思いました。無理もありません。佳子さんは、私たちのいきさつなど何も知らないのですから。それで佳子さんは、最近の演劇界の動向について話し始めました。

すると私たちは三人とも、水を得た魚のようになつてその話題にのめり込みました。とりわけ私は、その昔「劇団一の理論家」などと自他ともに認める存在でしたから、その方向の議論は自分がリードしなければ気が済まず、すらすらと論じたてました。私はその場でそれまで何年間も味わったことのない爽快そうかい感を感じました。

その日の翌日、トモ子さんから「ふたりだ

けで、また会いたい」と連絡がありました。私は彼女の意図をいぶかると同時に、わくわくするような懐かしさを覚え、すぐに了解しました。

それでその日のうちに私たちは会いました。私はてっきり昨日の演劇に関する話の続きをするのかと思いましたが、会うなり彼女はいきなり、「きょうは夫に内緒で来たの」と口を開きました。

栃木さん、あなたは、「こんな怪しい会合を、なぜその場で即座に拒絶しなかったのか」と私を非難することでしょう。でも正直申し上げて、私も実はその「怪しい会合」、世の中ではこれを「不倫の密会」という人もいますが、これを望んでいました。

その「密会」の場では、トモ子さんはいかにも思いつめたような感じで、こんなみすぼらしい私にさえ頼るような態度でとりとめもない話をしました。そうするうちに、私の中の悪魔がささやいて、「いつそのこと、この

女を抱いてしまおうか」と考えるようになり
ました。

しかしそのとき、私の脳裏に、彼女が劇団
を去るときに「わたしは必ずこの人としあわ
せを築いてみせる」と目を輝かせていった姿
が浮かんできました。そういえば、彼女はど
ことなく、後ろ髪を引かれる思いで家を出て
きたように見えました。

そこで私はこう思ったのです。

「この人は家庭生活に何かちよつと満たさ
れないものがあつて、それを埋め合わせたい
がためにここに来ているのだろう。だからそ
の『何か』さえ満たされれば、すぐにでも家
庭に戻っていくに違いない。彼女が『この人』
(つまりあなたのことですが)を最終的に裏
切るようなことは決してないだろう」

それで、その日は話をしただけで別れまし
た。

私はもうこのような密会は、その日限りで
終わつたものと思つていたので、ところ

がトモ子さんは、その後もひと月に数回ていど「会いたい」と連絡してきました。このようにして私たちの逢瀬はずるずると続きましたが、誓って申し上げますが、この間、私たちは「男女の関係」などといわれている不適切な行為は一切しておりません。

そして8年前のことでしょうか、ある日トモ子さんから、「もうこれを最後にしたい」といわれました。私は、これできっと彼女の途中で、満たされていなかった「何か」が満たされたのだらうと思い、この関係に終止符を打つことに同意しました。彼女とはそれ以来ずっと会っていませんでした。そして私はそれまでの彼女とのことを口外するつもりは一切ありませんでしたから、この関係そのものが「なかったこと」になるはずでした。

ところが去年、佳子さんからトモ子さんの病氣のことを聞き、私はひどく悲しみ、動揺しました。そして佳子さんと病院にお見舞いに行ったとき（あなたもそこにいましたね）

のことです。私たちはトモ子さんのベッドの脇にずっといましたが、何かの拍子に佳子さんがちよつとその場を離れたとき、トモ子さんは私に対し、苦しい息遣いのなかで、しかしはつきりところいったのです。

「あなたとこのことを夫に隠したままでは、死ねない」。

私は「そういうことは隠したままにすべきだ」と言い返そうとしたのですが、佳子さんがその場に戻ってきましたので、結局何もいえませんでした。

その後のトモ子さんの葬儀、それときよの一周忌に私は顔を出すことができませんでした。彼女との関係が発覚したのでは、と恐れれたからです。私は今後もあなたの前には姿を現さないつもりです。私はもう世の中から消えてしまったも同然な人間ですから。

しかし栃木さん、最後にもういちど繰り返しますが、トモ子さんと私との間には決して“不適切な関係”などはありませんでした。

どうかそれだけは信じてください。

三村悠介

私は三村のこの言い訳がましいメールを読んで嫌悪感を覚えました。トモ子との密会は、自分の意思からではなく、「トモ子に誘われたから」ということなのであり、そして自分は彼女を「抱きたい」と思ったことはあっても、最終的には「不適切な関係」などは一切なかったということなのです。

結局いまとなっては、本当にこのような関係があったかなかったかは、トモ子の口からはもちろん、三村の口から問い質すこともできません。

しかし本当に私が知りたかったことは、トモ子と三村の間に「どういう関係があったか」ということでしょうか。たしかに私は三村へのメールでそのことを聞きました。けれどそれは、私の嫉妬心、夫あるいは男のメンツか

ら出たもので、いまいちばん重要なことは、トモ子が貞操な妻だったかどうかということよりも、トモ子がどうこの“罪の意識”を白覚し、これをどう償ったかということではないでしょうか。

トモ子は三村と別れて以降、とりわけ私が会社を定年退職してからは私に対し、実に細やかにかつ親身に接してくれました。私はこの彼女の振る舞いを、元々彼女が持っていた資質から来ているものと思っていましたがいまから思うと、彼女はかなり意識的に気を配り、努力して私にアプローチしていたように見受けられます。

ただ私は、彼女のこの態度が単に“罪の意識”だけから出たものであるとは考えたくないのです。もし三村のメールにいくらかの真実が含まれているとすれば、トモ子が彼と「後ろ髪を引かれながら」会っていて、彼女のなかで「何か」が満たされれば密会に終止符が打たれるだろうという記述を信じたいので

す。そして彼女が「後ろ髪を引かれた」のは私への愛があり、「何か」とは私からの愛なのではないかと思いたいのでます。

トモ子は子どもに恵まれないことから生じた私との心のすれ違いを、「私からの愛が得られなくなった」と思い込み、悩んでいたのではないでしようか。こんな彼女の苦悩が、ヒカリちゃんからの癒しでやわらげられることにより、以前のように私からの愛を信じられるようになった、手前味噌かもしれないませんが、私はこう思いたいのです。

ではなぜ、トモ子は私に三村との密会のことを打ち明けたのでしようか。三村の言うように、本人さえ黙っていれば、この行為は「なかつたこと」になり、私がこの事実を知って苦しむこともなかつたのです。この理由を単に贖罪のためとか、思わぬ不治の病で死期が迫ったからというのはあまりにも単純です。これに関して私が現段階で推察できることは、次の二点です。

第一は、トモ子が自分の人生を完結させるには、いずれ私にこのことを打ち明けずにはいられなかったのではないかということである。演劇の世界に身を置いた彼女ならば、「自分の人生における罪や過ちを告白することなしには、自分の人生という『脚本』を完成できない」という考えがあり、これを秘匿したまま人生に幕を引くことは許されないと思っていたのかもしれませんが。

第二は、罪への対処の仕方として、通常はまずその罪を「告白」し、そして次にそれへの「償い」があるという順になりますが、トモ子の場合にはこれとは逆に、「償い」、「告白」の順になされたのはどうしてなのかについてです。始めに「告白」があつたらどうだったでしょうか。その場合、彼女がどんなに心からの私への奉仕を行ったとしても、私はそれを「償いのために行ったのだ」と受け取つてしまいがちになり、これでは奉仕するほうもされるほうも幸福感を得られなくなりそうです。

だから彼女が予めこのことを予測していたかどうかは別にして、結果的に「告白」のほうがいいになって、おたがいによかったといえるのだと思います。

わからないことはまだあります。トモ子が「遺言」の形で「罪」の告白を私に聞かせるのを、なぜ自身の死後1年以降に設定したのか。1年経てば、私がその衝撃に耐えられるだけ「強く」なっていることを期待したのか、それとも、そのころになると、私がもう彼女のことなど何とも思っていないように変貌してしまうと考えたのか。

いずれにしても、「いまの私自身」という存在そのものが、その問題の答になっているような気がします。果たして私は、トモ子のこの「試験」にどういう答を出したのでしようか。そして私はこの試験に合格したといえるのでしようか。

こんなとりとめもない思案に暮れていると、児童公園から子どもたちの歓声が聞こえ

てきました。そのなかには明らかにヒカリちゃんの歓声も交じっています。

「ああ、この無邪気さこそが、トモ子の魂も私の魂も救ってくれたのか」

ということだけが、いまところは確かなように思えます。

ヒカリちゃんはこの翌日、さらにそのまた翌日もやって来て、夏休みの宿題を終わらせました。私は「終わってよかったね」とはいつつも、少しさみしい気分を感じました。

そして夏休み最後の日、8月31日、ヒカリちゃんは、今度はニドリさんといっしょにやって来ました。ところがこのときのヒカリちゃんの顔にはいつものはじけるような笑顔はなく、うつむきがちでしょんぼりしていました。

開口一番ニドリさんはこういいました。

「この子が本当にお世話になって、どうもありがとうございました。おかげで夏休みの宿題も無事終わりました」

ミドリさんはいつものように、優しそうな笑顔を見せていましたが、しかし私にはこれが無理して装っている作り笑いのように見えませんでした。そして私のこの「いやな予感」は、すぐに次のミドリさんの言葉で現実のものになりました。

「実は、私たち一家は、この10月に仙台に引っ越すことになりました…」

私は愕然として、しばらくは開いた口がふさがりませんでした。この「引っ越し話」のいきさつとは次のとおりです。

ヒカリちゃんのお父さん、すなわちミドリさんの娘婿にあたる人ですが、そのお父さんの実家は、仙台で笹かまぼこの製造・販売を行っている老舗の会社です。この会社は、このお父さんの両親（ヒカリちゃんのお父方の祖母で、祖父のほうは「義男さん」、祖母のほうは「キヨ子さん」という名前だそうです）と何人かの従業員で営まれていて規模は小さいものの、ここで製造する笹かまぼこは味と

品質に定評があり、地元と全国に根強い愛好者を抱えています。

ところがあの2011年3月の大震災による津波で工場兼店舗が壊滅的な被害に遭いました。そしてその再建のための過労がたたり、キヨ子さんが急病で亡くなってしまいました。残された義男さんは必死で会社の再建と業務再開に漕ぎつけましたが、今年の春になつてついに自身も病に倒れ、からだの自由がきかなくなつてしまいました。

ヒカリちゃん一家が今年の大連休に帰省したのは、今後のことを話し合うためであり、義男さんはこのとき、「この会社はオレの代で終わりにしてもいい」といったつもりですが、さすがにヒカリちゃんのお父さんは、この会社の熱烈な顧客と従業員をこのまま捨ててしまふことはできず、両親のそれぞれがいまの仕事を辞めて、一家で移住して跡を継ぐことを決意したのです。

そして実は、ヒカリちゃんにこのことが初

めて知らされたのは、この日の前夜のことだったのです。彼女は、ミドリさんが私の目の前で事情を話している最中、うつむいて涙を浮かべていました。

私は少しのあいだ放心状態にありましたが、何を思ったか、うかつにも次のような言葉を発してしまいました。

「それで、ミドリさん、あなたもずっとあちらで生活されるのですか」

私は一瞬、自分の本心の一部を暴露してしまったと内心動揺しましたが、ミドリさんは事も無げにこう応えました。

「ヒカリが大きくなつて、手がかからなくなるまでです」

私はこの返事に少しホツとしたせいか、このあとさらに恥の上塗りになるような質問をしました。

「そのあとは？」

ミドリさんは怪訝けげんそうな顔をして、

「そのあとは…」といい、ちよつと間をお

いてから、「考えていません」といいました。私はここで愚かにも、笑みを浮かべてしまいました。

すると、それまで泣きべそをかいていたような表情をしていたヒカリちゃんが急に私の顔をのぞきこんで、ニヤツとしました。やはり、ませているというか、勘が鋭い子です。私は、こんな幼い子どもにさえ見透かされるような自らのバカげた言動に恥ずかしさを覚ええました。

やがてこの二人は帰っていきました。日没の時間が迫ってきたせいか、外ではヒグラシのせわしい鳴き声が聞こえていました。私はまだ暑さの残るなかではありますが、縁側に出てみました。

せつかくひよんなことから得られたかけがえのない縁であつたのに、この二人の「女性」——ひとりとはトモ子と私の魂を救ってくれた少女、もうひとりは「トモ子に代わり」私の力になつてくれた婦人——はあとひと月で私の傍

らを去っていくのです。

私は縁側から生垣越しに夏の夕暮の風景を見ながら、ふとトモ子に先立たれてからのこの一年間のことを回想し、また例の「紫の上亡き後の光源氏」のことを思いました。彼は紫の上が死んでもなお、多くの女性と栄華に囲まれていながら、何を見聞きしても紫の上のことを思い出してはめそめそし、しまいには望みどおり出家して世を捨てたのですが、私はこの間、とにかく、のた打ち回るように生きてきました。でもこうしてまた、ひとりになってしまいそうな境遇になっても、私の心の中にはやはりトモ子がいました。彼女は逝ってしまったてから1年経ってから突如現れて、私の心をかき乱し、いたずらっぽく笑って「しっかりしてよ」と私を励ましました。私はこれからも彼女のこの「挑戦」に応えていこうと思います。世を捨ててなんかいる場合ではありません。

半月ほど経ちました。私はヒカリちゃんへ

のはなむけとして、ある絵本を贈ることになりました。それはあの「かぐや姫」が登場する『竹取物語』を子ども向けの読みものにした絵本です。原文では、かぐや姫は「月の都の人」で地上の人と結婚などできるはずがないとわかっていながら、彼女に求婚したい願望をいだく5人の貴公子に対し、この世に存在し得ない贈り物を要求してひどい目に遭わせ、なかには死なせてしまった男もいるという残酷な面も見せますが、この子ども向けの絵本では、その辺のところはソフトにいくらか改作されています。

9月の満月の夜、私の招きに応じてやってきたミドリさんとヒカリちゃんの前で、私はこのプレゼントする絵本を読み聞かせました。するとヒカリちゃんは、この年頃の子どもにありがちなことですが、物語の主人公を自分に同一化し出しました。

たとえば、ヒカリちゃんは、貴公子の一人が偽の贈り物をしてばれた際に、かぐや姫が

皮肉をいってバカにしたときには、「ちよつとやりすぎたかな」といい、また月からのお迎えが降りてきて、かぐや姫が月の都に昇つていこうとする際におじいさんが泣いたときには、「おじいさん、泣かないで」といいました。

絵本を読み終わって外を見ると、澄み切つた夜空に「かぐや姫」の物語に出てくるような見事な満月が浮かんでいました。私たちは縁側に出て3人並んで腰を下ろし、その月をしみじみ見ました。

ヒカリちゃんはもう本当にあの月に昇っていくものだと思ひ込んで、目に涙を浮かべました。私もこの子との別れを目前にして、まるで彼女を月の都に送り出したいかのような惜別の情に駆られました。私たちはヒカリちゃんを真ん中にして、私が右手で彼女の左手を、またミドリさんが左手で彼女の右手を握り、その状態でしばらく月に見とれていました。

するとヒカリちゃんは突然ふたりの大人と握っていた両手を離し、私の右手とミドリさんの左手を引っぱってふたりの手と手を触れさせました。そのとき私とミドリさんは、どちらともなく、おたがいに手を握り合いました。

ヒカリちゃんのこの予想もせぬ行為が、自分がかぐや姫になりきって、あとに残される翁おきな おうなと媪おうなに「わたしがいなくなっても、仲よく暮らしてね」という思いから出たのか、それとも彼女の例のおませな感情から出たのかは、わかりません。

それでも私はこのとき、心臓が外に飛び出しそうなくらいどきどきしながら、ミドリさんの手を強く握りしめていたことだけは確かです。また願わくは、このときのミドリさんも同じときめきを感じてくれたはずだと思いたいのです。

庭からは、秋の虫の音がひっきりなしに聞こえていました。

その2日後、お隣のヒカリちゃんの家では朝から引越しのトラックに荷物を積む作業で大わらわでした。ノソはその間落ち着かずに、私の家と隣の家のあいだをうろろろしていました。

そして荷物の積み込みが完了し、いよいよこれから出発というときになり、ヒカリちゃんのお両親も含めて一家総出でこの家を訪れ、最後のあいさつをしました。お父さんとお母さんは、

「娘がいろいろとお世話になりました」といいました。私はそれに対して半ば儀礼的に「いえいえ、大したお力になれずに。仙台に行く機会がありましたら、ぜひともそちらのお店にも立ち寄らせていただきます」と応えました。するとそばで聞いていたヒカリちゃんが、

「きつとだよ。おばあちゃんも待っているからね」とさりげなくいいました。最後までどきりとさせることを言う子です。

トラックが出たあと、彼らも自家用車で出発しました。ヒカリちゃんとミドリさんは後部座席から後ろを向いて、窓ガラス越しにいつまでもこちらに向かってバイバイと手を振っていました。

「行ってしまった」と私はひとり言でつぶやきました。この日は残暑がぶり返してきていたせいか、再び静寂が訪れた周囲からはツクツクボウシの鳴き声が聞こえてきました。

四

季節は進みます。

10月も下旬になりました。あんなに笑いにあふれていた隣の家は、空き家になってしまいました。ノソは最大の楽しみにしていたあのキャットフードが食べられなくなり、当初は、私が与えた以前ののような“粗食”を受け付けませんでした。やがてしぶしぶ元のレベルの食生活に戻り、おかげでひと月前よりもだいぶスリムになりました。

ところで私はといえば、いま縁側に腰を掛けて短歌を思索しています。実は私は、市内のある短歌サークルにこの月の初めから加わっていたのです。そのサークルの歌会を翌日に控えて、そこで披露する歌を作らなければなりません。

私がこのサークルに入ることになった経緯はこうです。8月のトモ子の一周忌の集まりの際の懇親会で、トモ子と扇佳子さんの知り合いで藤野さんという生け花の先生をしてい

るご婦人が参加していました。彼女はもう八十歳近いにもかかわらず、多芸多才で生け花以外にも短歌や演劇の批評も行っています。

藤野さんは私にこう話かけました。

「トモ子さんの話では、あなたは大学で国文学を専攻していて、日本の古典文学にも詳しいそうだけど、短歌をやってみない？」

私は歌や俳句を観賞するのは好きですが、自分で作った経験はほとんどありませんでした。しかしこのときは、

「ええ、やってみたいと思います」と前向きに応えました。

するとこのとき、傍らで「ボクもやります」と応じた人がいました。私の家の左隣（当時のヒカリちゃんの家は右隣）に住む佐藤さんという五十代の男性サラリーマンです。私自身はこの人とは顔を合わせた際にあいさつを交わし、ごく短い世間話をするていどの関係でしたが、佐藤さんは、隣近所ということ

トモ子やミドリさんには世話になったということですよ。

かつてトモ子から聞いた話では、この佐藤さんは、会社ではあまり風采が上がらず、また家庭でも浮いた存在で、以前の私の職場にいたあの「玄さん」のような人だということですよ。

佐藤さんはいわゆる「サラリーマン川柳」の愛好者で、彼自身の生活もその題材に事欠かないため、自分でも毎年いくつかの自虐的な作品を作って投稿しているそうです。

このとき彼は、「川柳もいいけれど、もっと“格調高い”俳句をやってみたいと思ってしたが、俳句には季語というものがあって面倒くさそうだ。それなら、“より自由に”創作できる短歌がいいだろう」というようなことをいっていました。

そういうわけで、私と佐藤さんは、藤野さんが所属している短歌サークルに加わることになったのです。

この歌会があしたに迫っていたのに、いい歌が思い浮かばず、私は苦慮して庭を見つめていました。ミドリさんとヒカリちゃんが来なくなってからしばらく庭の草取りもしてなく、雑草がその間にかなり伸びていました。私はこの庭とその背後の雑木林の丘をしばらくながめ、ようやく苦し紛れに次の歌を思いつきました。

あしびきの丘のふもとの八重葎
心すきの隙を埋め合わせけり

ひどい作品です。「山」にかかる枕詞である「あしびきの」を小さな「丘」に使っているものでしょうか。なまじげんがく術学ぶって「あしびきの」という枕詞を使ってみたことが、かえってあだになったような気がしました。

案の定、翌日の歌会で藤野さんは、

『あしびきの丘』ねえ、ふーん」と辛辣しんらつな笑いを浮かべました。そしてさらに、こう付

け加えました。

「心の隙間に雑草が生い茂るようじゃ、あなた、雑念でいっぱいなんじゃないの」

藤野さんは、演劇の批評に限らず、短歌の評価も実に辛口です。そばで聞いていた佐藤さんも、冷や汗をかきながら苦笑いしていました。

しかし私は、「そうか『雑念』か。でも雑念も悪くはないな」と、恥ずかしいという思いよりはむしろさっぱりした気分でした。

数日後、SNSのフェード・ブックで現在の自分の心境などを投稿しようとしているとき、私あてのメールを受信しました。差出人はミドリさんでした。このメールには、一そろろって青葉城址を訪れた際に、例の馬上の伊達正宗像の前で撮影した写真が添付されていました。

メール本文には、引っ越し作業がようやく片づいたこと、ヒカリちゃんのお母さんとミドリさんが、笹かまぼこの製造・販売という新た

な仕事に向けて「修行中」であること（ミドリさんも当面この仕事を手伝っていくらしいのです）、ヒカリちゃんが早くも転校先で多くの友だちをつくったことなどが報告され、最後に、

「仙台にお越しの際はぜひご来店ください。心からお待ちしております」

と締めくくられていました。この「心からお待ちしております」にどのような気持ちが入められているのか、それとも単なる儀礼的なあいさつ文なのかはわかりませんが、とにかくこれでまた、「仙台を訪れる」という当面の目標が一つ増えたわけです。

秋の夕暮が近づいてきました。私は縁側に出て、いつものように庭の生垣とその背景をながめました。ノソもまたいつものことですが、やる気なさそうに寝ていました。

そういえば、あの藤野さんと佐藤さんが、私の「八重葎しげれる宿」を訪問したいといっていた（佐藤さんは隣人にもかかわらず、ま

だ我が家を訪れたことがなかったのでした。ことを思い出しました。そこでその前に「草取りと庭掃除もせねば」と思いながらぼんやりしている、一匹の赤とんぼが飛来して、私の肩のあたりに止まりました。この赤とんぼは、ちょうど1年前にやってきたように、トモ子の分身なのでしょう。じっと見つめていると、「コーちゃん、がんばってるみたいね」という声が聞こえてきたような気がしました。